

第44回

人と大地に 魅せられて



北海道に移住して約10年。東京出身の私にとって、この地の暮らしは驚きの連続。
出会った人々、食や自然に魅了された数々の体験について取り上げます。
今回は、札幌に隣接する江別市にある「蝦夷和紙工房 紙びより」をご紹介します。

移転後の工房は2022年11月にオープン。ギャラリー&ショップにはさまざまな紙作品が並ぶ。営業時間や紙漉き体験の日程はHPで確認。<https://ezowashi.com>

北海道で和紙の文化を育んで

さまざまな経験を経て職人へ

北海道で唯一という、和紙職人が営む和紙工房「蝦夷和紙工房紙びより」は江別市にあり、北海道の草木を素材にした和紙や北国の風景をデザインした和紙を制作している。工房にはギャラリー&ショップも併設され、紙漉き体験もできる。

工房を営むのは札幌出身の東野早奈絵さん。大学で自然科学を学び、並行して美術の教職課程も履修。理科と美術の教師として六年間働いた。

その後、上京。雑貨店の店長をしつつ、商品企画デザインを学ぶ中で、実際に自分で何かを生み出したいという思いが募った。そのとき浮かんできたのは、身近にあった「紙」の可能性。

「小さい頃から紙が好きでした。白い紙の上ではいろんな世界を展開できるし、文房具店でさまざまな種類の紙を見てワクワクしたり」

和紙の本を手に入れ産地をめぐる旅をしようと思った。ページをめくって一番気に入ったのは越前和紙。色や柄、装飾の多彩さに惹かれた。

「工房を訪ねると、職人が簀桁（紙を漉く道具）を動かしていて、水のし

東京都出身。美術の専門出版社で雑誌・書籍の編集に約20年携わり、2011年に北海道へ移住。

2018年に「森の出版社 ミチクル」設立。北の自然や人をテーマにした本を刊行している。イラストエッセイ『山を買う』など。



ハルニレ、カラマツ、オヒョウニレなど北海道の植物を素材につくった和紙。

ずくの音だけが響く、静寂の中で仕事をする姿に感動しました」

生産現場には後継者不足や需要の減少など多くの課題があった。この実情に危機感を感じたという東野さんは、東京から福井県越前市に週末通い、三か月間の研修を受け、二〇〇七年から職人として働くことになった。

「とにかく奥深い世界でした」

一度うまく漉けたとしても、気温や湿度が変化する中で、同じ品質をキープするのは並大抵のことではなかったという。五年間働いた後に転職となる出来事があった。家族が大病を患い、札幌へ戻る決心をした。

北海道らしい和紙づくりを模索

実家の近くに古民家を借り、半年間の準備期間を経て工房を開いた。

北海道は和紙を使う文化が根付いておらず、どんな使い方ができるのかを伝えるところから始まったという。また、原料としてポピュラーな植物は本州産のものがほとんどだったため、北海道の植物で和紙ができないかと模索を始めた。最初に手掛けたのはオヒョウニレ。アイヌ民族が衣服の素材とした樹木で、ここから繊維をとって紙を漉いた。

「荒々しい質感の和紙ができました」
平滑でキレイな仕上がりをめざし

に最初は戸惑ったというが、「ワイルドで面白い」と周りの人は喜んでくれた。そこで、一年に一種類ずつ新しい植物で和紙づくりをする「蝦夷和紙プロジェクト」を開始。制作には多くの工程があつて、徐々にサポートしてくれる人々の輪も広がり、和紙のファンも増えていったという。

工房を続けて十年。コロナ禍で経営的にも苦しさに伴う中で大きな打撃があった。借りていた古民家の取り壊しが決まり、移転を余儀なくされた。実家からそれほど離れていない場所で物件を探したが、資金の折り合いがつかず、精神的に追い詰

められた。あるときSNSでその窮状を発信。多くのシェアがあり、それが思いがけない物件との出会いにつながった。厚別区から近い江別市大麻に、英語学校として使うために建てられた建物があった。大家さんは東野さんの熱い想いを受けとめ、快く貸し出しに応じてくれたそうだ。以前の工房に比べ広さは何倍にもなった。ギャラリースペースとして使われていた場所もあり、存分に活動できる新天地となった。

和紙とともにある暮らしの魅力を知つてほしいと、和紙職人がたった一人で始めた工房。そこには東野さんの人生経験のすべてが生かされている。大学で自然科学を学んだことが「蝦夷和紙プロジェクト」に生かされ、教師としての経験は紙漉きを教える際に役立ち、雑貨の企画・デザインを学んだことも、和紙の商品開発につながっているという。さらには多くの困難の積み重ねがあつたからこそ、素晴らしい新天地へと導かれたのかもしれないと思う。

北海道の風土に根差した和紙の文化を育むという、道なき道を歩む挑戦は、これからも続いていく。